

# 「宮城県を応援する高知応援隊」に参加して

(株)第一コンサルタンツ 調査一課 伊藤 哲也

## 1. はじめに

6月17日～6月20日の4日間、「宮城県を応援する高知応援隊」に参加し、東日本大震災で被災した宮城県でボランティア活動を行った。参加者は宮地電機社長の宮地貴嗣を応援隊長とし、各企業から集まった総勢57名であった。6月17日、6時30分に高知龍馬空港に集合し、出発式が行われた。出発式では現地での注意事項と活動内容の説明があり、最後に「宮城県を元気にするぞ!」というかけ声で一致団結の意志を確認した。



写真：瓦礫の状況



写真：出発式の様子

## 2. 現地視察（6月17日）

仙台市内に到着したのは午後1時30分を過ぎていた。仙台駅周辺は本当に地震があったのかという感じであった。

仙台駅からバスに乗り込み被災地の多賀城市、七ヶ浜町、塩釜市、東松島市を視察した。

バスに乗ってしばらくして、一階部分が津波により壊された住宅や破壊された車、瓦礫の山が目立ってきた。この状況を見て東北に地震があったことを実感した。TVで見た光景より自分の目で見る方が恐怖を感じた。



写真：地震による被害状況

津波により大型タンクが倒されていた。津波の驚異的な破壊力を実感した。

七ヶ浜町ではバスを降り、被災状況を確認した。海岸が目と鼻の先にある町だったので津波の被害が甚大であった。まず目に飛び込んできたのは大量の瓦礫であった。住宅の基礎部分が残っていた。ここにいくつかの住宅があったことが想像できた。しかし、何棟あったのか、どこが境なのかというのは判断できる状況ではなかった。



写真：七ヶ浜町の被害状況



写真：南三陸町の被害状況



写真：玄関の階段部分だけ残った家

根こそぎ津波にさらわれた家もあった。玄関の階段部分だけが残っている家もあった。

宿に向かう途中にも倒壊した住宅や瓦礫の山を見た。地震の驚異を感じる1日となった。

### 3. 炊き出し（6月18日）

この日は、南三陸町と気仙沼市に分かれて避難所にいる被災者の方々に炊き出しと支援物資を届けた。私は南三陸町の避難所に行った。TV等でよく報道されていると思うが、被害が大きい地区の一つである。避難所に向かう途中には七ヶ浜町を凌ぐ光景が広がっていた。津波ですべての物が破壊されており、街の原型を想像することができなかった。当然、住宅は跡形もなく流されていた。三階建の建物が骨組みだけの状態になっていた。

避難所では、いろいろな県からやってきたボランティアの人が子供達の面倒をみたり、瓦礫の片付けを行っていた。炊き出しの準備ができると避難所の人々がぞくぞくと自分専用のトレイを持って出てきた。それを見て、何度も炊き出しがきたのだと感じた。



写真：避難所の状況



写真：炊き出しの状況



炊き出し終了後、よさこい鳴子踊りを被災者の方々と踊った。たいへん好評で、被災者の方々と交流を深めることができた。「毎朝のラジオ体操をよさこいに変えよう」といってくださった方もあった。避難所生活はストレスが溜まる。いい気分転換になったと思う。

私は、炊き出しで余った料理を南三陸町歌津馬場地区に運ぶ役もさせてもらった。そこは小さな公民館のような建物が避難所になっていた。この地区も海が目の前に広がっており、津波の被害が大きかった。そこでもボランティアの人が瓦礫を撤去していた。南三陸町よりさらに遠くに位置するため復旧が遅れていた。道路に家の瓦礫がはみ出している状況であった。被害は海岸に近い地区のほうが甚大であるにも関わらず、復興は後回しになるという過疎地の現実を知った。



写真：歌津馬場地区の被害状況



写真：道路にはみ出した住宅の瓦礫

この地区の多くの方は、元の場所に家を建て直すのではなく、山を切り取り、新しい土地を造成するそうだ。地震で被害のあった場所にまた住む気持ちにはならないようだ。

南三陸町の避難所では、代表の方に話を聞くことができた。



写真：避難所代表の方に話を聞く

宮城県は過去にも 50 年足らずの周期で大地震が起きており、日頃から地震や津波に対する意識はあった。しかし、過去の地震では、津波があっても被害がなかったことから、「津波ボケ」をしていたという。「津波がここまでくることはない」という認識の甘さが人的被害を大きくした。また、一度避難したにも関わらず、津波が来るまで 30 分以上あったので家に引き返し、仕事の書類や、貴重品などを取りに帰り津波にあった人が大勢いたそうだ。地震があつて避難した場合、揺れが収まったからといってすぐに戻ってはいけない。いい教訓になった。

避難所には、大きな被害を受けたにも関わらず、懸命に明るく生活を送っている人々の生きる強さを感じた。避難所の代表の方もそうだが、地震の話を伺うと、思い出したくない事のはずであるが貴重な話をしてくださった。子供達も元気に遊んでいた。帰る時には大きな声で「ありがとう」と言ってくれた。みなさんを元気にするために行ったのに逆に元気づけられた。南三陸町の皆様「ありがとうございました。」



写真：高知応援隊と避難所の皆様

#### 4. ボランティア活動（6月19日）

この日は多賀城市でボランティア活動を行った。まず多賀城市役所でボランティアの登録を行った。市役所は、ボランティアが必要か住民から依頼を受け、それに対応してボランティアに来た人を派遣するという形をとっていた。

被害状況や活動中の写真はプライバシーの関係で撮ることはできなかった。



写真：ボランティア受付所

私は大代地区公民館付属の体育館の泥出しと清掃を行うことになった。この体育館は2回目の清掃だった。地震の影響で床が凸凹の状態になっており、一度掃除されているものの床に泥が残っていた。

この体育館には住民の方々から、写真の泥をきれいに拭き取ってほしいという依頼もくるため、体育館の中には写真が数多く持ち込まれていた。泥のついた写真を見るのは大変つらい

ものがあった。この作業は人数も多かったのですがすぐに終了となった。

次に私は、個人宅で、泥出しと貴重品の整理を行った。まず、強烈な臭いに驚いた。津波の被害を受けていたのである程度の予想はしていたが、塩水の乾いた臭いと、ゴミの生臭さで、マスクなしでは作業ができる状況ではなかった。ゴミの中から貴重品や、まだ使えそうな物を探す作業をした。家は取り壊して新しく建て直すそうだ。こういった作業は家一軒で2日以上かかるそうだ。周りにはまだ沢山の家があった。全部を終わらすとなると気の遠くなる作業である。

参加していた仙台市内の方によると、ボランティア活動は海外の人や、県外からくる人は非常に多い。同じ宮城県内の人あまりこないそうだ。

#### 4. おわりに

今回のボランティア活動では、大変貴重な経験ができた。感じたことを3つ挙げると、  
① 津波に対する防災訓練や避難の重要性  
② 復興に向けた被災者の力強さ、助け合い  
③ 継続的なボランティアの必要性  
である。

近い将来、高知県にも南海大地震がくるといわれているので津波が恐ろしいものであるという認識を持ち、日頃から防災に関する事にアンテナを張り、地震がきたら迅速に対応できるようにしたい。

被災者の生活を見て、いつまでも下を向くのではなく復興に向けて一歩ずつ歩くことが大切である。1人では辛くなる事も仲間がいれば何とかなると感じた。

震災発生直後はたくさんあった支援の手が減ってきていると感じた。まだ支援の手が届いていない場所もあることを忘れてたくない。しかし、被災者の方で「いつまでも支援に頼っていては自立を遅らせる」と話してくれた。いつまで支援を続けるか、どこまで支援するのか。難しい問題である。